

ネットにおける過剰

ーフーコーとライアの権力論からネット暴力を見るー

CHEN Fuyu

インターネットの発展が進んでいる今、ネット暴力は社会的な注目を集めている。この新たな社会問題は、世界中に波及している。もちろん、中国も同じ問題で悩まされている。筆者は中国人留学生であり、実際に中国で発生したいくつかのネット暴力を直接観察しており、常々それについて関心を持っていた。そこで、いくつかのネット暴力事件を考察してみたところ、それはミシェル・フーコーの「規律化」と強い関係を持つことに気づいた。

フーコーが論じた規律化は、パノプティコンという監視型の監獄から始まり、それが社会全体に届く権力の作用のことである。その権力が社会にいる人々の身体細部にまで至り、規律化することである。本論文は『監獄の誕生』というフーコーの著書を起点として、「従順な身体」という規律化について整理し、分析する。それだけではなく、先行するフーコー研究も含めて、近代社会の「従順な身体」の起因、変形及び完成の経緯を整理した。その上で、現代社会のなかで、「従順な身体」はどのような形で進んでいるかについて、筆者自身の考えも論じた。

現代社会と近代社会との一番おおきな違いは、おそらくインターネットの普及という点であろう。現代人の生活は、インターネットの使用を回避することはできないと思われる。それに基づいて、デイヴィッド・ライアの「監視社会論」は提出された。監視社会論は超パノプティコン的な社会監視理論として、インターネットという現代生活に欠かせないものの上で成立する。その中心論点の一つが、権力が過去のように直接人々の身体を監視し、影響を及ぼすのではなく、人々の行動をデータ化し、それを監視する。人の身体は無意味化し、データを通じて人々に影響を与える。筆者はライアの『監視社会』という著書を起点として、「消失する身体＝データ化された身体」という新たな権力の作用について整理し、分析した。当然、フーコーの分析と同様に、他の学者や筆者自身の考えも含めて整理した。

この二人の学者およびそれに関する論点の整理により、ネット暴力は一見自由な意見表示により発生した言説衝突だが、実は非常に規律化された行動であることがわかった。筆者はある中

国 SNS で発生したネット暴力について整理をし、それに関する社会的欲求とネット社会における権力を分析した。人々がネット社会で見せる行動は高度な規律化行為であるということを、マズローの承認欲求に基づいて考察する。現代人はフォーコーが論じた「従順な身体」とライアの「消失する身体」の特徴を融合し、ネット社会にのみ存在する「新時代の従順な身体」となった。それは、現実社会で個人化の尊重と規律化により生じた疎外感の衝突で、承認欲求が以前よりいっそう強くなっている。それを解消するために、自分の意見を「自由」にインターネットで表し、承認を求める。自分の同士を見つけると過剰同調し、他方で、自分と違う意見の人は、すなわち自分の存在を否定したい敵であり、容赦なく攻撃するのが正しいのである。その考えは、全て「従順な身体」と「データ化された身体」によって生み出されたものである。これを筆者は、「新時代の従順な身体」と呼びたい。

本論文でネット暴力の発生のメカニズムの一側面をあきらかにすることで、さらに現代社会に存在する権力のあり方を展望できる基礎としたい。